

琉球大学学術リポジトリ

北琉球・名護市幸喜方言の可能表現の文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2014-09-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: かりまた, しげひさ, Karimata, Shigehisa, 狩俣, 繁久 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/29638

北琉球・名護市幸喜方言の可能表現の文

かりまた しげひさ

本稿は、沖縄島北部名護市幸喜集落の方言の可能表現の文についての報告である。幸喜集落出身の宮城萬勇の収集・編集した『名護市幸喜方言辞典』（仮題）の草稿を出版刊行するため、かりまたと仲間恵子が幸喜集落の依頼をうけ、草稿に記載された単語の音声と意味と品詞の確認作業をおこなう過程でえられた用例と自然会話に出てきた資料の中からとりだした可能表現の文を検討の対象とする。なお、方言資料は暫定的な音韻記号で表記する。標準語訳をつけるが、標準語の形式と意味的にずれるものは、カタカナで表記した擬似的な標準語訳を付す。

現地調査は、かりまたと仲間恵子が2000年4月から幸喜区公民館において実施している。2013年10月8日で504回の調査を行ない、なお継続中である。話者は幸喜集落在住のM.Y.氏（1916年～2012年）、M.H.氏（1920年生）、O.E.氏（1917年）の三人。いずれも幸喜生まれ育ちで、両親も配偶者も幸喜出身者である。なお、調査は辞典編集のための語彙の確認が中心であり、文法に関する資料は、調査の回数の割にかならずしも十分なものとはいえず、その意味で本報告は中間報告的なものである。

1 可能表現の文と可能動詞

可能表現の文は、現実世界に存在する出来事が可能なものとして、あるいは不可能なものとして存在していることをあらわす。可能表現の文のあらわす可能・不可能には、大きく分けると、能力可能（能力不可能をふくむ）と条件可能（条件不可能をふくむ）のふたつがある。奥田靖雄（1986、P.188）は、能力可能と条件可能をつぎのように規定している。

能力可能を表現する文は／ある動作・状態が実現する能力が物にそなわっている／という意味をつたえているが、条件可能を表現する文は／条件が存在していれば、あるいは条件が存在しているために、ある動作・状態の実現が可能である／という意味を伝えている。

現代日本語の可能表現の文の述語には、「飲むことができる」「起きることができる」のような形式と「飲める」「起きられる」のような形式がある。前者は、「する」、「ことが」、「できる」の3単語から成る分析的な形で、後者は、語根に接尾辞をつけてつくる総合的な形の派生動詞である。現代日本語の可能表現の文の述語のふたつの形は、能力可能も条件可能もあらわすことができ、きわだった文法的な意味のちがいがみられない。条件可能と能力可能は、可能動詞の形態論的な形によって表現されるのではなく、文の構文論的な構造によって表現される。

名護市幸喜方言の可能表現の文の述語には、numi:suN（飲める）とuki:suN（起きられる）のタイプの派生動詞とnumaiN（飲める）とukiraiN（起きられる）のタイプの派生動詞のふたつのことなる可能動詞がある¹。いずれも総合的な形の派生動詞である。幸喜方言のふたつの可能動詞は、能力可能と条件可能の文法的な意味の表現とむすびついている。前者の可能動詞numi:suNとuki:suNは、主として能力可能をあらわし、後者の可能動詞numaiNとukiraiNは、主として条件可能をあらわす。本稿では、前者を能力可能動詞とよび、後者を条件可能動詞とよぶことにする。

幸喜方言のふたつの可能動詞の形のちがいは、可能表現の文のあらわす意味的なちがいと結びついているのだが、述語になる可能動詞の形のちがいがだけが可能表現の文の意味的なちがいをあらわしわけているわけではなく、主体や客

¹ wakaiNは、能力可能も条件可能もおなじ語形であらわし、wakaraNは、能力不可能も条件不可能もおなじ語形であらわす。

1) unu cju:ja kaNbe:hanu gumane: etiN wakaiN.

その人は敏感で小地震でも分かる。

2) unu cju:ja kaNni:hanu ne: jutiN wakaraN.

その人は鈍感で地震が来ても分からない。

体としてさしだされる名詞の構文論的な意味のちがい、あわせ文の構造的なちがいもおおきく関与している。

他動詞から派生した可能動詞を述語にする可能表現の文において、ハダカ格の名詞が可能動詞の客体（直接対象）としてあらわれる。ハダカ格の名詞は、対格のほかに主格、属格、与格などをあらわす多義的な形式だが、幸喜方言には直接対象をあらわす専用の格助辞はなく、対格を表わせるのはハダカ格だけである。直接対象をあらわすハダカ格の日本語訳はカタカナの「ヲ」で表記する。

2 能力可能を表現する文

能力可能を表現する文は、主語のさしだす主体に動作・状態を実現する能力がそなわっていることをあらわす。動作・状態は、実際には実現されておらず、実現の可能性が表現されていて、主語によってさしだされる主体のポテンシャルな特性として表現されている。能力の持ち主は人でも動物でもよい²。能力可能を表現する文は、能力可能動詞の肯定・非過去形を述語にもつ。

1) unu waraija cjuici kinu ki:suNdoja:.

その子は一人で服ヲ着れるよ。

2) siracjaguja gaQsanu wanuniN wai:suN.

コバンモチ（の木）は軽くて、（女の）私にも割れる。

3) pa: cju:hanu u:gi: gasanai kami:suN.

歯が強くて、甘蔗ヲがりがりとし食べられる。

4) unu kwa: du:ja gumahasuga gute: aitu magiisi etiN muci:suN.

その子、体は小さいが、体力があるので、大石でも持てる。

² 人と動物以外のものが能力の持ち主になれるのか未確認である。

2.2 能力不可能

能力不可能を表現する文は、主語のさしだす主体に動作・状態を実現する能力がそなわっていないことをあらわす。能力の欠如が主体のポテンシャルな特性として表現される。能力不可能を表現する文の述語には能力可能動詞の否定・非過去形があらわれる。

5) jakumiNgatija zjo:i i:ke:si:saN.

(私は) 兄には絶対に言い返せない。

6) awatinu ganija anaN hamei:saN.

慌てる蟹は、穴も探せない。

7) keQsa kukuruja asigaciN meNgatija susumi:saN.

いくら心は焦っても、前には(仕事を)進められない。

8) arigaja ke:si:saNtu karacjenu zini: akiramiN.

彼は返せないので、貸した金をあきらめる。

9) du: ubohonu cju:ja uguki:saN.

体の重い人は、動けない。

10) wa:gaja i:saNtu ja: izi arini pakasimirasje:.

私には言えないから、君が行って彼に弁償させなさい。

11) nu:ga kaminukucjeru. buruja kami:saN.

何故残してあるんだ。全部は食べられない。

ふたまた述語文のつきそい文に特性形容詞の中止形があらわれて、形容詞のさしだす特性と能力の欠如という特性が主体に並存していることをあらわしている。

12) du:ja magihasuga gute: jo:hanu magiisija mucu:saN.

(その子は) 体は大きいが、体が弱くて、大石は持てない。

13) unu inaguja su:te: arahanu ja: muQci:saN.

その女は、金遣いが荒くて、家庭ヲ持てない (結婚できない)。

14) anu ikigaja kimugunahanu cju:nu me: izi:saN.

あの男は内気で、人の前に出られない。

15) anu kwa:ja sikahanu duQcija wa:puruNgati iki:saN.

あの子は、小心で、一人では便所に行けない。

16) ma:maja ti:gupahanu mo:i:saN.

姉は、不器用で、踊れない。

17) waQta ha:paja mimi: to:honu kiki:saN.

うちの祖母は、耳が遠くて、聞けない。

18) tunainu oto:ja do:hanu ja:niNzju sikanai:saN.

隣のお父さんは、(体が) 弱くて、家族ヲ養えない。

19) kaQsanu cju:nu meNti panasi: su:suja cirapazikahanu si:saN.

多くの人の前で話ヲするのは、気恥ずかしくて、(私には) できない。

原因をあらわすつきそいあわせ文のいいおわり文が能力不可能をあらわすとき、つきそい文は主体に能力が欠如している原因理由をさしだしている。つきそい文は、形容詞述語文、あるいは、名詞述語文であり、ポテンシャルな特性をさしだしている。

20) anu cju:ja sikahatu cju:ni munu: tanumi:saN.

あの人は、小心なので、人にもヲ頼めない。

21) ma:maja ti:gupahatu no:i:saN.

姉は、不器用なので、縫えない。

22) anu cju:ja ki:jo:hanu cju: etu cju:ni munu: i:saN.

あの人は、気弱な人なので、人にもヲ言えない。

2. 3 過去の能力可能

能力可能を表現する文には、動作を実現する能力が主体の特性として過去にあったことをあらわすものがある。過去の能力可能とは、実際に過去に何度か動作の実現を確認し、そのことをとおして動作を実現する能力が主体の特性と

してそなわっていたことをあらわす。能力可能を表現する文には、能力可能動詞の肯定・過去形が述語にあらわれる。

23) tunainu kwaNkwa:ja cjuici kinu ki:sutaN.

隣の子は、一人で服ヲ着れた。

24) wanu etiN wakahaneja u:gi: tatawaina muci:sutaNdo.

私でも若い頃は、甘蔗ヲ2束ずつ持てたよ。

25) wakahaneja hajasi:sutasuga tusi: tutatu namaja mo: nacjeN.

若いころは（甘蔗の束を）運べたが、年ヲとったので今は原野にしている。

26) wakahaneja nu: etiN i:sutasuga namaja i:saNsa.

若いころは何でも言えたが、今は言えないな。

2.4 過去の能力不可能

能力可能動詞の否定・過去形を述語にもつ文は、過去に動作を実現する能力が主体になかったことをあらわす

27) tunainu waraija cjuicija kinu ki:saNtaN.

隣の子は、一人では服ヲ着れなかった。

28) go:ja:ja wakananera kami:saNtaN.

苦瓜は若いころから食べられなかった。

29) arija ku:haneN uigi:saNtaN.

彼は、幼い頃も泳げなかった。

30) anu cju:ja duQcija wa:puruNgati iki:saNtaN.

あの人は、一人では便所に行けなかった。

31) sugu nuraraitu pu:punija nuN i:saNtaN.

すぐ叱られるから、祖父には何も言えなかった。

2.5 特定の対象に依存する特性をあらわす文

客体・対象の特性に依存する能力可能が特定の個人の特性として固定化する

と、その個人の好みや性格をあらわすようになる。能力不可能のばあいも同様に個人の好みなどをあらわす。

32) wanuja ju:nu sasimija kamaisuga takunu sasimija kamaraNdo:.
私は、魚の刺身は食べられるけど、蛸の刺身は食べられないよ。

33) anu cju:tuja panasaisuga hunu cju:tuja nuN panasiN naraN.
あの人とは話せるが、この人とは何も話もできない。

3 条件可能を表現する文

条件可能を表現する文は、つきそい文にさしだされる条件・状況のもとで、あるいは、条件・状況にささえられて、動作・状態の実現が可能であることをあらわす。条件可能の文は、述語のさしだす動作の持ち主＝主体に能力がそなわっているか否かについては問わない。動作の実現は、ポテンシャルな可能性として存在する。条件可能を表現する文の述語には条件可能動詞の肯定・非過去形があらわれる。

34) ziniga aine nu: etiN ho:raiN.
金があれば、なんでも買える。

35) ti:ci naineja naNkuru aQkainu gutu naiN.
一歳になったら、自然に歩けるようになる。

36) mi:gasimarahanu gaNcjo: hakiriwaru ma:iru.
(老眼で) 目がぼやけて、眼鏡ヲ掛ければ、見えるのだ。

37) ha:paga: etiN aciju: hakine ha: sa:ranai pagaiN.
カワハギでも、熱湯ヲかければ、皮ヲさっと剥げる。

38) pisa jamaci aQkaraNtasuga namaja no:ti aQkaiNdo:ja:.
足ヲ怪我して歩けなかったが、今は治って、歩けるよ。

39) me:nu kui u:riti jagati haraiNja:.
稲の首ガ折れて (穂が稔って)、もうじき刈れるね。

40) umukasiN kutasine sikaraiN.

芋滓も、発酵させたら、(料理に) 使える。

3.2 条件不可能

条件不可能を表現する文は、つきそい文にさしだされる条件・状況のもとでは動作・状態の実現が不可能であることをあらわす。条件不可能の文も、述語のさしだす動作の持ち主＝主体に能力がそなわっている否かについては問わない。条件不可能を表現する文の述語には条件可能動詞の否定・非過去形があらわれる。

41) du:ga siki: aranu munu aineja kimusikizikituja kamaraN.

自分が好きじゃないものがあると、 落ち着いては食べられない。

42) irumi ikirahaneja kuraharaN.

収入が少なければ、暮らせない。

43) me:nu pamaja asaraNkine minaja turaraN.

前の浜は掘り起こさなければ、貝は採れない。

44) amini di:tutu kinu ke:raNkine iQciN uraraN.

雨に濡れているので、服ヲ替えなければ、座ってもいられない。

45) jaNme:ja no:tusuga na:ma: cju:ini:hanu poroNgati ikaraN.

病気は治ったが、まだ回復が遅くて、畑に行けない。

つきそい文には主体の特性があらわされるが、つきそい文の主体は、いいおわり文では相手対象としてあらわれ、その主体＝相手対象の特性が動作実現をさまたげる条件としてあらわれる。つきそい文の主体の特性はポテンシャルなもので、いいおわり文の実現不可能性もポテンシャルな出来事である。

46) arija kucigaQsanu ariNgatija nuN ja:raN.

彼は口軽で、彼には何も言えない。

47) anu ikigaja kimugunahanu ukaQtu munu: ja:raN.

あの男は内気で、(彼には) うっかりもの言えない。

48) wa: kwa:ja taNkira:hanu munuN ja:raN.

うちの子は短気で、(うちの子には) 物も言えない。

49) unu kwa:ja guruhanu hasimiraraN.

その子はすばしこくて、(その子を) 捕まえられる。

50) anu cju:ja ti:gusi: waQsanu pireraraN.

あの人は、手癖が悪くて(盗癖があって、彼とは) 付き合えない。

51) anu cju:ja ti:nagahatu uQkatu pireraraN.

あの人は盗癖があるので、(彼とは) うっかり付き合えない。

52) sugu kusamikutu ariNgatija nuN ja:raNdo:.

すぐ腹を立てるから、彼には何も言えないよ。

つきそい文の述語に主体の状態や特性をあらわす形容詞があらわれて、いい
おわり文であらわされる主体の動作実現をさまたげる条件をさしだす。

53) hata: du:gorohonu nagiraraN.

肩が具合悪くて、投げられない。

54) ciNsi du:gorohonu aQkaraN.

膝が具合悪くて、歩けない。

55) aNda: sikatatu naNburahanu do:gu hasimiraraN.

油ヲ使ったから、(手が) すべっこくて、道具ヲ掴めない。

56) waQta ja:ja kwa:ga su:te: arahanu humekiraraN.

我が家は子供が家計が粗くて、儉約できない。

57) maNgu:suja du:gaQsanu turaraN.

マンガースはすばしこくて、取れない。

58) unu tomato:ja o:hanu na:ma muraraN.

そのトマトは青くて、まだ収穫できない。

3.3 過去の条件可能

過去の条件可能とは、ある条件のもとで実際に過去に何度か動作を実現したことをひとまとまり的にみて、ある条件のもとでは、動作・状態の実現が可能であったことをあらわす。過去のポテンシャルな可能性をいいあらわす。条件可能動詞の肯定・過去形が述語にあられる。

59) Nkasija ici etiN iraitaN.

昔は、いつでも（バスの席に）座れた。

3.4 過去の条件不可能

過去の条件不可能とは、ある条件のもとで動作・状態の実現が不可能であったことをあらわす。条件可能動詞の否定・過去形が述語にあられる。

60) me:hai si:neja du:buru pasiko:honu kuraharaNtaN.

稲刈りしたら体中痒くて、暮らせなかった（たまらなかった）。

3.5 条件可能から特性をあらわす文への移行

条件可能を表現する文において、動作のはたらきかけをうける対象が「～ヤ（は）」の形になって主語としてさしだされ、動作を行なう動作主体が背後にしりぞくと、主語の位置にあられる物が不特定の人による動作の受け手になりうる特性をさしだす。受身文のように動作の客体が主語になる。

61) siracjaguja do:hanu sikararaN.

コバンモチの木は、もろくて使えない。

62) unu tomato akadi kamaiNdo.

そのトマト、赤くなって、食べられるよ。

63) unu maNgoja akamige:tutu turaiN.

そのマンゴは、赤みを帯びているので、採れる。

特性をあらわす可能動詞の連体形が名詞を修飾すると、形容詞化がいつそうあきらかになる。

64) gi:dagina kamainu ju:N aiN.

小骨ごと食べられる魚もある。

65) pikisakainu nunuN ai pikisakaraN nunuN aiN.

引き裂ける布もあるし、引き裂けない布もある。

3.6 条件不可能から特性をあらわす文への移行

条件不可能を表現する文において、動作のはたらきかけをうける対象が「～ヤ（は）」の形になって主語としてさしだされ、動作を行なう動作主体が背後にしりぞくと、主語の位置にあらわれる物が動作の受け手にならないという特性をさしだす文へと移行する。

66) unu si:kwa:haja o:hanu na:ma kamaraN.

そのシークワサーは青くて、まだ食べられない。

67) unu to:puja si:hazjasi kwa:raN.

その豆腐は、饅えた臭いがして、喰えない。

68) unu to:puja nutunutusi ukahanu kamaraNsa:.

その豆腐は、ねとねとしてあやしくて、食べられないよ。

69) unu ja:duja ko:riti ku:raraNdo:.

その戸は、壊れて閉められないよ。

70) uri ja ko:riti sikararaNtu kirihitiri.

それ（鍵）は、壊れて使えないから、切り捨てろ。

71) inana unumama ucjetatu sabi ku:ti sikararaN.

鎌ヲそのまま置いてあったので、錆びついて使えない。

72) unu ja:duja su: kwa:ti akiraraN.

その戸は湿気ヲ含んで（ふやけて）開けられない。

73) tusi: tutunu wa:sija hazizju:hanu kamaraN.

歳ヲとった豚肉は、筋が固くて食べられない。

74) patakini nage: ucjenu de:kunija hazizju:hanu kamaraN.

畑に長く置いた大根は、筋っぽくて食べられない。

75) unu basonaija na:ma umaNtu sibuhanu kamaraN.

そのバナナは、まだ熟まないので、渋くて食べられない。

76) taNsinu a:sija sibahatu munu: ukaraN.

箆筥の隙間は、狭いので物ヲ置けない。

3.7 過去の特徴

条件可能動詞の肯定・過去形、あるいは否定・過去形を述語にもつ文には、主語の位置にあらわれる物が不特定の人による動作の受け手になりうる特性、あるいは動作の受け手にならない特性が過去に存在したことをあらわすものがある。

77) marumugija kuciNti bukubukusi kamaraNtaN.

丸麦は、口でブクブクして食べられなかった。

78) magiju:ja nakaziNra wati ha:kasine nage ukaitaN.

大きな魚は、中落ちから割って乾かすと、長く置けた。

79) umukasija gi:ci tidabusi si:ne nage ukaitaN.

芋滓は、握って（丸めて）日干したら、長く置けた。

4 能力可能と条件可能

能力可能と条件可能を表現する文のちがいが、主として構文論的な構造によってあらわしわけられている現代日本語のばあい、条件に依存する能力可能（能力不可能）をあらわす文と、能力に依存する条件可能（条件不可能）をあらわす文を見きわめるのはむづかしい。奥田靖雄（1986、p.190）は、つぎのように述べる。

能力可能をいいあらわす文において、その能力可能が条件に依存していること、あるいは条件に左右されないことをいいあらわしているものがある。条件可能を表現している文において、その条件可能が能力に依存していること、あるいは能力には左右されないことを表現しているものがある。このような文は、あわせ文の特殊な構造的なタイプとして整理することができるか、たんに意味のうえのことにすぎないのか、このことを判断するだけの材料をぼくはもちあわしていない。(中略) いずれにしても、能力可能と条件可能のあいだに、はっきりした境界線をひけないことも、うたがいない。

能力可能動詞と条件可能動詞のふたつのことなる可能動詞をもつ幸喜方言において、条件に依存する能力可能を表現する文と、能力に依存する条件可能を表現する文がどのようにあらわれるかをみてみよう。

4.1 条件に依存する能力可能

条件的なつきそいあわせ文のいいおわり文の述語に能力可能動詞の肯定・非過去形があらわれるとき、つきそい文にさしだされる条件のもとで能力が発揮されることをあらわす。条件に依存する能力可能を表現する文は、限定された条件のもとで発揮される能力可能をあらわす。主体の能力を保証する条件は、つきそい文によってあらわされる。

80) ha:paja pa: neNsuga humaku ki:neja kami:suN.

祖母は、歯が無いけれど、細かく切れば、食べられる。

81) ha:paN sumahai e:neja kami:suN.

祖母も、一杯なら食べられる。

82) tusi: esuga sutawai e:neja muci:suN.

(私も) 歳だが、一束なら (甘蔗を) 持てる。

いいおわり文の述語に能力可能動詞の肯定・過去形があらわれると、限定さ

れた条件のもとで、条件に依存して発揮される能力が過去にあったことをあらわす。

83) maQcjanu ha:paN sumahai e:neja kami:sutaN.

亡くなった祖母も、一杯なら、食べられた。

4. 2 条件に依存する能力不可能

条件的なつきそいあわせ文のいいおわり文に能力不可能を表現する文があらわれるとき、本来は所有している能力がつきそい文にさしだされる条件に制約されてその能力を発揮できないことをあらわす。いいおわり文の述語には能力可能動詞の否定・非過去形があらわれる。

84) nicini ukahaineja du:N izjukasi:saN.

熱にうかされたら、体も動かせない。

85) unu sigutuga acja:madi e:neja si:saN.

その仕事が明日までなら、(私には) できない。

86) uriga naQpi cju:hane jamaNsigaN piki:saN.

それ(罌)がもう少し強くければ、猪にも引けない。

4. 3 能力が関与する条件可能

通常の条件可能を表現する文は、主体の能力の有無をとわないが、つぎの例のように主体の能力の有無が関与したものがある。主体の能力に制約があって動作の実現が不可能な状況にあるのだが、つきそい文にさしだされた条件のもとで、動作の実現が可能になることをあらわす。いいおわり文の述語に条件可能動詞があらわれ、主体の能力の制限がつきそい文や場面によってしめされる。

87) ti: gumahanu sikami:saNsuga gumahaneja wanu etiN sikamaiNdoja:.

手ガ小さくて握めないけど、(それが) 小さければ、私でも握めるよ。

88) wanu aNmahasuga kunuhu e:neja kamaiNdoja:.

私、体調わるいけど、みかんなら、食べられるよ。

89) haribaNka e:neja ko:unNkiciN kirikudi ikaiN.

枯葉だけなら、(小さな) 耕運機でも切り込んでいける。

4. 4 能力が関与する条件不可能

主体の特性によって能力の実現が制限されるなか、条件的なつきそい文にさしだされる条件が成立すると、動作の実現が不可能になることをあらわす文がある。能力が関与する条件不可能を表現する文は、いいおわり文の述語に条件可能動詞の否定・非過去形があらわれ、制約された主体の能力が原因的なつきそい文や場面にしめされる。

90) pa: jo:hatu magihaneja kamaraN.

(祖母は) 歯が弱いので、大きければ、食べられない。

91) na:ma pa: mi:raNtu humaku kiraNkineja kamaraN.

(その子は) まだ歯が生えないので、細かく切らなければ、食べられない。

92) unu wa:sija hupahatu humaku kirikizjamaNkineja kamaraN.

その豚肉は、固いので、細かく切り刻まなければ (祖母には) 食べられない。

5 実現を表現する文

可能動詞を述語にもつ文は、主として能力可能、条件可能をあらわすが、文がアクチュアルな出来事をあらわすとき、人が目的の動作を行動にうつして実現したレアルな出来事をあらわす。能力可能、条件可能を表現する文がいずれもポテンシャルな特性をあらわすのに対して、実現を表現する文は、時間的なありか限定のある過去、あるいは、現在のアクチュアルな出来事をあらわす。能力可能動詞、条件可能動詞の肯定・過去形をいいおわり文の述語にもつ文は、過去の実現をあらわす。実現は可能動詞の過去形を述語にもつ文に特有な意味である。可能動詞の否定・過去形をいいおわり文の述語にもつ文は、過去の非

実現をあらわし、可能動詞の否定・非過去形を述語にもつ文は、現在の非実現をあらわす。

5.1 実現

条件可能動詞の肯定・過去形をいいおわり文の述語にもつ文が時間的なありか限定のあるアクチュアルな出来事をあらわすとき、つきそい文のさしだす出来事によって動作が実現したことをあらわす。主体の能力は問題にならない。原因的なつきそい文のなかに動作の実現をうながしたリアルな出来事があらわされる。

93) maNiN etasuga juziti turasunu cju:nu utatu iraitaN.

満員だったが、譲ってくれる人がいたので、座れた。

94) taruN nutija neNtatu iraitaN.

誰も乗ってなかったので、(バスの席に) 座れた。

5.2 能力が関与する実現

能力可能動詞の肯定・過去形をいいおわり文の述語にもつ文のあらわす実現は、意志的な主体の能力が発揮されて動作・状態が実現したことをあらわす。動作の実現は、主体の能力に依存している。

95) kinu cjuici u:gi: muci:sutaNdoja:.

昨日一人で甘蔗ヲ持てたよ。

96) kikuja te:zju:hanu kinuN u:gi: tatawai hatami:sutaNdo.

菊さんは、力強くて、昨日も甘蔗ヲ二束担げたよ。

5.3 非実現

条件可能動詞の否定・非過去形をいいおわり文の述語にもつ文は、つきそい文にさしだされるアクチュアルな出来事が障害となって動作が実現しないことをあらわす。動作の実現しない状態が話の瞬間＝現在におよんでいる。主体の

能力の有無は問われない。

- 97) nu:gara ku:ja du:ubohonu ukiraraN.
何だか今日は怠くて、起きられない。
- 98) aQkizju:hanu pisa ubohotu na: aQkaraN.
歩き過ぎて足が重いので、もう歩けない。
- 99) nu:gara ku:ja ciburu ubohonu munuN kamaraN.
何だか今日は頭が重くて、物も食べられない。
- 100) anu inagutuja o:e: sa:tu du:gorohonu ikararaN.
あの女とは喧嘩したので、きまり悪くて会えない。
- 101) ja:ga ju:nu kutuba gunahatu nu:gara kikituraraN.
あなたが言う言葉が小さいので、何だか聞き取れない。
- 102) ku:ja icjunahanu aga tei biciNgatija ikaraNsa.
今日は忙しくて、私たち二人、別（の所）には行けないよ。
- 103) ku:nu iricja:ja aNdazju:hanu kamaraN.
今日のイリチャーは、脂っこくて、食べられない。
- 104) ku:ja naminu arahanu puni izjaharaN.
今日は波が荒くて、船ヲ出せない。
- 105) pi:nu mugeti kibohonu munu: ma:raN.
火が燃え上がって煙たくて、物ヲ見られない。
- 106) gu:dujasi sa:suga amazjaki irizju:hanu si:hanu kamaraN.
和え物ヲ作ったが、酢ヲ入れすぎて、酸っぱくて食べられない。
- 107) ku:nu asaja o:pigurahanu zjo:siki naraN.
今日の朝は、底冷えして、炊事ヲできない。
- 108) ku:nu surija cju: ikirahanu kaigi naraN.
今日の集会は、人ガ少なくて、会議できない。

5.4 能力が関与する非実現

能力可能動詞の否定・非過去形をいいおわり文の述語にもつ文は、主体の能

力の発揮をさまたげる出来事によって、予定されていた動作、あるいは意図的な動作が実現されないことあらわす。つきそい文にさしだされるアクチュアルな出来事が原因となって動作の実現をさまたげる。

109) tusi: tutatu namaja hajasi:saN.

年ヲとったので、今は（甘蔗を）運べない。

110) wanuja pisa: jamacatu na:da aQki:saN.

私は、足ヲ怪我したので、まだ歩けない。

111) ku:ja wanuja pisa jamutu poroNgati iki:saN.

きょうは私は、足ガ痛いので、畑に行けない。

112) wanu zini: neNtu aNbaki:saN.

私、金ガ無いので、弁償できない。

113) cju:ni mi:waku hakitu du:gorohonu i:saN.

人に迷惑ヲかけるので、心苦しくて言えない。

114) amaja takahanu uturahanu para etu nuhui:saN.

向こうは高くて怖いところだから、（私には）登れない。

つきそい文に一時的でアクチュアルな状態がさしだされ、その状況のなかで動作が実現できないことをあらわす。

115) arija nage: nicini ukahaQti uki:saN.

彼は、長く熱にうかされて、起きられない。

116) pu:puja saki numizju:hanu aQki:saN.

祖父は、酒ヲ飲みすぎて、歩けない。

117) pu:puja saki numizju:hanu du: mucu:saN.

祖父は、酒ヲ飲みすぎて、体ヲ持てない（支えられない）。

118) ku:nu kwaQkija sukoidatira:hanu kami:saN.

今日のご馳走は、豪華すぎて、食べられない。

5.5 過去の非実現

条件可能動詞の否定・過去形をいいおわり文の述語にもつ文は、つきそい文にさしだされるアクチュアルな出来事によって動作の実現がさまたげられたことをあらわす。主体の能力の有無は問われない。

119) kinuja imikasimarahanu niNbaraNtaN.

昨日は夢見が悪くて、眠れなかった。

120) asanu basuja maNiN etatu sju:teNmadi iraraNtaN.

朝のバスは満員だったので、終点まで座れなかった。

121) namaja no:ti aQkaisuga pisa jamaci aQkaraNtaNdo:ja:.

今は治って歩けるが、(先週まで) 足ヲ怪我して、歩けなかったよ。

5.6 能力が関与する過去の非実現

能力可能動詞の否定・過去形をいいおわり文の述語にもつ文は、つきそい文にさしだされる出来事によって主体の能力の発揮がさまたげられて、動作が実現できなかったことをあらわす。

122) zini: neNtatu wa:gaja aNbaki:saNtaN.

金が無かったので、私には弁償できなかった。

123) ni:nu ubohonu cjuicija muc:saNtaN.

荷物が重くて、一人では持てなかった。

124) ku:nu asabaNja irizjo:honu buruja kami:saNtaN.

今日の朝食は、入れすぎて、全部は食べられなかった。

6 可能動詞の形態論的な特徴

奥田 (1986) によれば、可能表現の文は、必然表現の文、現実表現の文とともにものがたり文の枠の中で小体系をなして存在している。可能表現の文は、ものがたり文の枠のなかでの位置を占めながら、可能性としての、ポテンシャ

ルな出来事をあらわす文としてあらわれるため、その述語の位置にあらわれる可能動詞の形態論的な特徴に影響をあたえている。

能力可能動詞は、実現動詞の第一中止形に派生接辞isuNをつけてつくる。活用のタイプは強変化動詞である。条件可能動詞は、動詞語根に派生接辞aiNをつけてつくり、受け身の形とホモニムである。条件可能動詞は、強変化型の活用形と弱変化型の活用形が混在した混合変化動詞である。

能力可能動詞と条件可能動詞のいずれも、第二過去形は確認できたが、第一過去形は確認できていない。強変化動詞であればもつはずの音便語幹が能力可能動詞に確認できていない。

実現動詞の第二過去形は、アクチュアルな過去の出来事をあらわし、目撃性のつきまとったdirect evidentialityを表現する形式である。第二過去形を述語にもつ文には人称の制限があって、一人称を主語にすることができない。しかし、第二過去形が過去の習慣をあらわすとき、人称制限から解放されて一人称のことであわせるようになる。第二過去形のあらわす過去の習慣は、ポテンシャルな出来事である。可能動詞の第二過去形のあらわす過去の能力可能も、過去の条件可能もポテンシャルな出来事である。過去の習慣も過去の能力もポテンシャルな出来事だという点で共通する。

能力可能動詞と条件可能動詞に命令形や勧誘形などのムード形式がみられないことも可能動詞の形態論的な特徴である。また、ふたつの可能動詞を派生させた元の動詞にあった継続相の形式がなく、アスペクトの対立をもたないことも可能動詞の特徴である。おなじ活用のタイプに属する第一使役動詞と受け身の形とふたつの可能動詞のテンス・アスペクトを対比してみる。

	能力可能	第一使役	条件可能	受け身
非過去	jumisuN	jumasuN	jumaiN	jumaiN
第一過去	—	jumacjaN	—	jumaQtaN
第二過去	jumisutaN	jumasutaN	jumaitaN	jumaitaN
継続相	—	jumacjuN	—	jumaQtuN

可能動詞を派生させた元の動詞とのあいだにある形態論的な特徴のちがいは、可能動詞がポテンシャルな出来事をあらわすこととかかわっていて、命令形、勧誘形などのムード形式がないこと、過去形にひとつの形式しかないこと、アスペクト対立をもたないことは、可能動詞と形容詞の共通の特徴でもある。

7 能力可能と動詞派生の形容詞

能力可能を表現する文と似た意味をあらわすものとして接尾辞 *zjahaN* を動詞第一中止形に後接させた派生形容詞を述語にもつ文がある。

125) *cutomuja amici ju: tuizja:haN.*

ツトムは、網で魚ヲ獲るのがうまい（上手に獲る）。

126) *na:ma gaQko: iziraNsuga zi: hakizja:haN.*

まだ学校に行っていないが、字ヲ書くのがうまい（上手に書く）。

127) *kucinu magihanu cju:ja utaizja:haN.*

口の大きな人は、歌うのがうまい（上手に歌う）。

128) *taija wakahanake:ja mo:izja:hataN.*

二人は、若い頃は踊りがうまかった（上手に踊った）。

この派生形容詞は、連用的な格を支配し、派生の元の動詞とおなじく様態副詞的な擬声擬態語によって修飾されるという動詞の性格を保存していて、この派生形容詞を能力可能動詞に言いかえることができる。

129) *pa: cju:hanu u:gi: gasanai kamizja:haN.*

歯ガ強くて、甘蔗ヲがりがりと食べるのがうまい（上手に食べる）。

130) *pa: cju:hanu u:gi: gasanai kami:suN.*

歯ガ強くて、甘蔗ヲがりがりと食べられる。

派生形容詞は、動作実現に関するポテンシャルな特性だけでなく、評価的な

意味もあわせもっていて、形容詞としての性格を有している。それに対して、能力可能動詞は、動作を実現する可能性を有するという側面がつよくあらわれ、形容詞と動詞の品詞のちがいは依然としてたもたれているといつてよい。

追記：本稿は2013年度科研費基盤研究(A)課題番号24242014、および、国立国語研究所委託事業の研究成果の一部である。

参考文献・引用文献

- 奥田靖雄（1986）「現実・可能・必然（上）」『ことばの科学1』むぎ書房
- 金子尚一（1986）「日本語の可能表現〈現代語〉－標準語のばあい－」『国文学解釈と鑑賞』51-1
- かりまたしげひさ(2014)「沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語－和琉辞典の試み」『琉球の方言』38号、法政大学沖縄文化研究所
- かりまたしげひさ(2013)「沖縄北部名護市幸喜方言の格形式」琉球大学国際沖縄研究所『人文社会科学を主体とした先端的琉球・沖縄学の次世代研究者の育成研究推進成果報告書』第2号
- かりまたしげひさ(2013)「沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語」『琉球の方言』37号、法政大学沖縄文化研究所
- かりまたしげひさ(2012)「沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語擬態語」『日本東洋文化論集』第18号、琉球大学法文学部紀要
- 佐藤里美（1986）「〈文末表現の指導〉可能表現の文の指導」（『教育国語85』むぎ書房）
- 渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』第33巻第一分冊
- 平良美由紀（2012）「うるま市与那城照間方言の可能表現」『琉球方言研究 第3号』琉球大学法文学部琉球方言研究室
- 津波古敏子（1992）「琉球列島の言語（沖縄中南部方言）」（『言語学大辞典セクション日本列島の言語』亀井孝・河野六郎・千野栄一編著 三省堂）